

『狂人日記』第十二節 "～, 難見真的人!" の解釈をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊田, 正信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/798

『狂人日記』第十二節“～，難見真的人！” の解釈をめぐって

菊田 正信

(一)

拙稿「“救救孩子……”」(1999年4月「金沢大学中国語学中国文学教室紀要」第3輯)においては、魯迅の『狂人日記』の結びの一句である“救救孩子……”をどのように解釈すべきかについて論じたが、その際、“救救孩子……”直前の第十二節の解釈にも触れざるを得なくなり、とくにその末尾の“難見真的人！”については、丸尾常喜著「「難見真的人！」再考—「狂人日記」第十二節末尾の読解」(1992年)(以後「再考」と略記)への異見を付記することとなった。

異見は、語法的に見ての“難見”の“難”の理解から「再考」の結論に異を唱えたものであるが、「再考」の周到さに対して、付記という形をとったこともあって十分応えた内容になっていない。遺憾なことであった。ここで改めて、“難見真的人！”がどのような表現であるのか、明らかにしてみたい。

(二)

「再考」では、“難見真的人！”の解釈について、「「ほんとうの人間に合わせる顔がない！」とする理解が正しいという蓋然性は客観的にきわめて高い」と結論されている。「再考」ではさらにこの箇所を解説して、「狂人は自分自身と「ほんとうの人間」＝「人間を食わない人間」との間に広がる深い「乖離」を自覚し、彼らにたいする「羞恥」の意識に把らえられる。」としている。即ち、“難見真的人！”は「ほんとうの人間に合わせる顔がない！」という狂

人の「羞恥」の表現だとするのである。

これに対して拙稿では、“难见真的人！”をこのように狂人の「羞恥」の表現だとする理解は「もっぱら主体の心の状況を示すことになるので適切でない」とした。その理由を次のように述べた。「語法的に見て、“难见”の“难”は動詞に前置してその動作、行為の遂行が困難であることを示すが、遂行が不可能であることを示すわけではない。“难见”は従って、「なかなか会えない」意である。さらにまた、その遂行を困難ならしめる要因をその動作、行為の及ぶ対象のあり方に求める言い方である点にも注意したい。(例えば“难学”において、“学”することを妨げるのはその対象が複雑な体系をもっていることなどによるものであって、“学”する主体の能力不足などによるとはしないのである。)“难见真的人！”の場合、“真的人”のあり方、この場合はその少なさに要因が求められると見るべきであろう。」

(三)

『狂人日记』第十二節全体を読みかえしてみよう。第十二節全文は次の通りである。

不能想了。

四千年来时吃人的地方，今天才明白，我也在其中混了多年；大哥正管着家务，妹子恰恰死了，他未必不和在饭菜里，暗暗给我们吃。

我未必无意之中，不吃了我妹子的几片肉，现在也轮到我自己，……

有了四千年吃人履历的我，当初虽然不知道，现在明白，难见真的人！

狂人はこの第十二節で、妹の肉を食べたかもしれないという恐れにとりつかれ、ついには、自らも、“吃人的人”に連なっているのだと覚る。狂人はこれまで、“吃人”の被害者として、また批判者としての立場に立っていたが、このとき、狂人自身も加害者なのであり、恥ずべき存在としての、淘汰されるべき存在としての“吃人的人”の一人であることに気づいたのである。そして第十二節の最後は、“有了四千年吃人履历的我，当初虽然不知道，现在明白，难见真的人！”としめくくられる。

この最後の文を解釈するうえでいくつか注意すべき点がある。ひとつは“有了四千年吃人履历的我”という句である。“我”のような人代名詞は人称の区別を示すことにその本質があるので、限定語（修飾語）を付けることはあまりしない。限定語を付けるときは、“我”なら“我”の立場や来歴を確認したりあるいはそれに変更を加える場合である。ここでは、“有了四千年吃人履历(的)”が“我”の立場、来歴に変更のあったことを示している。

次に注意すべきは、この限定語中の“有了～”という表現である。接尾辞“了”が添えられているので、こと（がら）が顕現すること、現実化していることが示されていると理解される。従って“有了四千年吃人履历的我”で、「四千年来の食人の歴史をもつことになった私」「四千年来の食人の歴史をもった私」といった意味になろう。

このようにして、この句以降は、それまでの“我”とは違う存在となった“我”が支配する。“当初虽然不知道，现在明白”のいわゆる主語が問題になることがあるが、当然、この違う存在となった“我”が主語である。そして、“有了”は“现在”と呼応しているのである。

さて、“难见真的人！”は“当初虽然不知道，现在明白”の後に続くが、この“不知道”や“明白”の内容を示すいわゆる目的語として置かれているとみてよいだろう。“不知道”や“明白”の目的語は必ずものやことの有り様をその内容とするはずである。“难见真的人！”を「再考」の解釈に従って「ほんとうの人間に合わせる顔がない！」という羞恥の、直接的な、いわば情念の表現としてとらえるとする、この“不知道”や“明白”の目的語としては不適切ということにならざるを得ないのではなかろうか。「ほんとうの人間にはめったに会えないのだ！」「まっとうな人間はほとんどいないのだ！」といった、有り様についての表現として読むべきであろう。

第十節で“吃人的人”は“真的人”に比べてどんなに“慚愧”な存在かとしていた“我”は、しかしなお、自らの立場を自覚していたわけではない。この第十二節のこの場に至ってはじめて、自らも、“吃人的人”の一人であることを発見し自らの立場を自覚するのである。“难见真的人！”には、“真的人”との絶望的な隔絶感がにじんでいる。

(四)

“难见真的人！”を含む文は以上のように読むのが順当だと思われるが、“难见真的人！”という句自体についても説明を加えておきたい。「再考」ではこの句にしぼった検討がなされており、拙稿でも(二)に再録したように“难”の使われ方から異見を提したのみであった。

“难”は動詞に前置して、その動作、行為の遂行が困難であることを示すとしたが、この「“难”＋動詞」は述語形容詞風に使われる。

(1) 就是先生讲点理，太太小姐们也很难伺候。

(老舍『骆驼祥子』)

「“难”＋動詞」の動詞は、一般には目的語を伴わず、動作、行為の対象は主題として、前置される形をとる。そしてその主題について、動作、行為の遂行が困難であることを示すのである。(1)では“太太小姐们”が主題として提示され、それに対して“很难伺候”「お仕えするのが大変だ」と一種の属性が述べられている。動作者、行為者を示すいわゆる主語はない。

ところが、次のように動詞が目的語を伴った形となる例も存在する。

(2) 已越混越低，有的已很难吃上饱饭。

(老舍『骆驼祥子』)

(3) 乡下人真难办事，永远没有个痛痛快快。

(老舍『茶馆』)

この場合、動作、行為の対象は、この目的語によって示される。そして、その目的語に対しての動作、行為の遂行が困難であることが示されるのである。

“难”の使われ方に違いがあるわけではない。ただ、この場合、“难”に前置されている名詞の性格を見定めておく必要があるだろう。例えば(3)は「田舎者はまったく手が焼ける、～」といったことで、“乡下人”は主題として提示されているとみられる。“难办事”は従って、その属性として述べられているわけであろう。(2)の場合はどうであろう。“有的”は動作者、行為者を示す主語ではなく、これも「あるもの(にあっては)」という主題としての提示と考えられる。“难吃上饱饭”は「腹いっぱい飯になかなかありつけない」と、そ

の有り様を述べているわけであろう。

“难见真的人！”は(2)と同類であって、主題は明示されていないが「ほんとうの人間にはめったに会えないのだ！」「まっとうな人間はほとんどいないのだ！」と有り様が述べられていると理解され、(三)の結論と矛盾しない。

(五)

ところで、“难见～”という言い方が、羞恥の一表現として機能することもあることを指摘しておきたい。例えば“难见张老师”という言い方は、上に述べてきたような理解によれば「チャン先生にはなかなかお会いできない」といった意味にとってよいであろう。遠く離れて住んでいらっしゃるとか、お病気がちであるとか、何らかの要因で会えないときの表現である。ところが、この“难见张老师”が「チャン先生に顔を合わせられない」「チャン先生に合わせる顔がない」といった意味を担うことがあるのである。何か失敗したり、不都合なことをしでかしたりといった場合に使われる。

では、このような変異が何故起きるのだろうか。これは“见”という動詞の意味に着目するほかないであろう。“难见～”と言うときの“见”は「(目上の人や尊敬する人、ないし一般の常識人など、ある一定の水準にある人に)会う」といった意味を基本とする。逆に言うと、“难见～”はある一定の水準からは相対的に低い位置からの表現だと言える。羞恥が何らかの水準よりは劣位にあるという観念から発するものだとすれば、この劣位の観念が、この表現にすべりこむのであろう。“难见～”が基本としている低い位置からの表現という型が、劣位の観念を受け入れるのだと仮定できるように思われる。その故にであろう、このような“难见～”の表現が成立するときには、前提として、劣位の観念がことばによって示されたり、劣位の観念を抱かせることになった失敗や不都合が場や文脈上に明らかにされるのである。

「再考」には羞恥の表現だとして“难见～”の用例がいくつかあげられているが、いずれも上述のように理解できると思われる。ひとつ例を挙げておこう。魯迅の『买《小学大全》记』に引かれている『清代文字獄檔』の尹嘉銓の供述から次の一節があげられている。

問：你当时在皇上跟前讨赏翎子，说是没有翎子，就回去见不得你妻小。你这假道学怕老婆，到底皇上没有给你翎子，你如何回去的呢？据供：我当初在家时，曾向我妻子说过，要见皇上讨翎子，所以我彼时不辞冒昧，就妄求恩典，原想得了翎子回家，可以夸耀。后来皇上没有赏我，我回到家里，实在觉得害羞，难见妻子。这都是我假道学，怕老婆，是实。

ついでながら、1行目の“见不得你妻小”が「再考」では「妻や子に合わせる顔がない」と訳されているが、“-不得”の用法からして「见不得」は「会うことがかなわない」「会うことが許されない」といったことであろう。5行目の“实在觉得害羞，难见妻子”の“难见妻子”の箇所も同様に「妻に合わせる顔がなかった」との訳が与えられているが、ここはまさに上で指摘したように、“实在觉得害羞”という前提を受けての羞恥の一表現となっていると理解される。

なお、羞恥の表現としての“难见～”は使われる範囲、場面が限定的であろうと予想しているが、これはさらに検討を要する課題である。“见”を使った羞恥の表現としては、次のように“没(有)脸见～”といった言い方が安定した型となっているように思われる。

“我们没有脸见人，就只因为你，”男人气忿地说。

(鲁迅『颓败线的颤动』(『野草』所収))